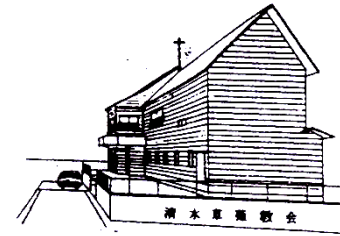


《今朝の聖書から》

新聖歌の 356 の、折り返しのところに“場所（ところ）を備えて、われを待ちたもう、君に見（まみ）ゆる、日ぞ懐かしき”というのがあります。私たちは“懐かしい”という言葉をとんたときに使うのでしょうか。小さなころの思い出や、今はまったく異なってしまっている昔の姿などを思い出して、つかうのではないのでしょうか。生きていなかった昔のこと、例えば聖書に出てくる、ダビデ王さまの時代などは“懐かしい”という言葉は普通は使いません。ましてやこれから先のことについては、期待に胸を膨らませることなどには、“早く味わいたい”などという言葉は使いますが、懐かしいなどとは言わないと思います。ところが先に掲げた聖歌や賛美歌には、何ヶ所も懐かしいという言葉が出てきます。言葉の意味からして、知っていること・信じて確実なこと、について“懐かしい”という言葉を使っているのでしょうか。天地創造の昔も、天の御国・天国も、私の人生の時間を超えて、親しみを持てるので、そう言っているのです。今朝の聖書箇所は、ニコデモが夜に、人目を忍んで、主イエスを訪ねるところから記録されています。彼は、自分の信じていることを確かめたかったのでしょうか。3節に、イエス様の答えがあります。信じて新しく生まれた者には見えるというのです。ニコデモは、確信を持ちます。彼は“もう一度生まれる”という言葉の意味を知りたいと思います。彼は身分地位もそんなに低くはなく、自分の行いに責任が伴う立場にあったのでしょうか。イエス様は、この世で生き、この世で信仰をもって生活することについて語っておられます。このことはニコデモも知っていました。“あなたに神様が伴われることを認めなければ、あなたのなさっていることは信じられない（2節）”と告白しているのです。しかし彼の生活の基盤は、時が来れば滅び行く豊かさに支えられていました。そこから離れなければ、いつまでたっても、あなたは私の語っている天の御国のことを信じることはできないだろうと教えられるのです（12節）。このことをはっきりと知らせるために、6節の言葉を与えられます。“肉から生まれた者は肉であり、霊から生まれた者は、縦横無尽の自由が与えられた霊なのだ”と、御国と私たちの世界が切り離されていないことを語られるのです。連続した世界なのです。ここで主を信じて新しくされることを“新生”として私たちに語られます。私たちが知っているとおりであり経験したことなのです。ですから懐かしの御国なのです。

週報

2008年 5月 25日



伝えよう 救い主を
迎えよう 主の民を

日本フリーメソジスト

清水草薙キリスト教会

教会学校	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル会の会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈祷会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	http://kusanagi.church.jp/	

T 424-0885

静岡市清水区草薙杉道3丁目2-26

☎054-345-4070 E-Mail grace@big.jp

牧師 村上定幸